文学に映るハンセン病
シャーロック・ホームズの『白面の兵士』で考える
ハンセン病の「差別」と「隔離」

宮野　佳[1)]，本田蘭子[2)]

1）川崎医科大学生化学
2）広島大学教養教育

（令和２年10月２日受理）

Hansen's Disease Reflected by Literature
Consider "discrimination" and "segregation" at Hansen's disease
through *Sherlock Holmes' The Blanched Soldier*.

Kei MIYANO[1)], Ranko HONDA[2)]

1) Department of Biochemistry, Kawasaki Medical School
2) Liberal Arts Education, Hiroshima University
(Accepted on October 2, 2020)

概　　要

2020年４月，日下喬史川崎医科大名誉教授が逝去された。日下先生は，同大学生化学教室の教授として長らく本学の医学教育にご尽力された一方，ご専門のハンセン病の研究でも優れた功績を残された。「ハンセン病」は，人類が経験してきた感染症として，コロナ禍の今（2020年９月），その歴史にまた新たな光が当たっている。そこで，本稿では主にハンセン病の「差別」や「隔離」の歴史に焦点を当て考察した。

まず，主に20世紀の日本におけるハンセン病の差別の歴史を簡潔に振り返り，その一方で差別を克服するための一例として，名称の変更を取り上げた。具体的には，シャーロック・ホームズシリーズの短編『白面の兵士』に言及し，文学と差別的表現との複雑な関係性について考察した。次に，強制的な隔離政策について言及し，その背景に「疎外の理論」があったことを述べた。最後に，『癩者へ』という詩を紹介し，内省のきっかけとするものである。本稿は，日下先生への追悼であるとともに，特に若い世代とハンセン病に関する考察を共にする機会になればと考える。

キーワード：ハンセン病，シャーロック・ホームズ『白面の兵士』，差別，隔離

Kawasaki Ikaishi Arts & Sci（46）：1－12（2020）
Correspondence to Kei MIYANO
Department of Biochemistry, Kawasaki Medical School
577 Matsushima, Kurashiki, 701-0192, Japan
Phone：81 86 462 1111
ＦＡＸ：81 86 462 1199
E-mail：kei-miyano@med.kawasaki-m.ac.jp

Abstract

In April 2020, Department of Biochemistry received the sad news that Honorary professor Kusaka Takashi had passed away. As a professor at Department of Biochemistry at Kawasaki Medical School, he had not only contributed a great deal to medical education but also succeeded in identifying lipid component which is specific to the Mycobacterium leprae in Hansen's disease and revealed its chemical structure.

Speaking of Hansen's disease, as one of infections which afflicted humanity, its history has come to draw some degree of attention again since our facing the difficulties of the Covid-19 in 2020. In this paper, first I introduce the history of discrimination against Hansen's disease and then refer to the transition of the term from "leprosy" to "Hansen's disease" by way of example to eliminate the discrimination[註1)]. Specifically, I develop the argument citing *Sherlock Holmes' The Blanched Soldier* (1927), which story is related to "Hansen's disease" and includes some discriminatory expressions against the patients. This consideration reveals what relationship there is between literature and the discriminatory expressions.

Next, I deal with the compulsory segregation policy, which started around 1930 in Japan and but was not abolished even after the WW2. Behind such national neglectfulness was so-called "theory to eliminate the weak", which means the patients' human rights were relatively disrespected in favor of the more immediate needs of rapid economic growth. Last, I quote a poem composed by Kamiya Mieko in 1943 in order to expect to help us introspect to our own minds. Here, I would like to pay my final respect to Honorary professor Kusaka Takashi and share the opportunity to think the history of Hansen's disease especially with the younger generations.

Key words: Hansen's disease, Sherlock Holmes, *The Blanched Soldier*, discrimination, segregation policy

はじめに

2020年４月，川崎医科大学生化学教室に同大学名誉教授である日下喬史先生ご逝去の報が入った。私自身は直接のご教授をいただく機会はなかったが，日下先生は生化学教室の教授として1996年に退職されるまで20年近く，本学の生化学研究および医学教育にご尽力された方である。ハンセン病の研究に邁進され，1983年には「らい菌」にのみ含まれる特殊な脂質成分を突き止め，その化学構造を解明された。

「ハンセン病」といえば，近年ニュース等で耳にする機会も多かった。ハンセン病家族訴訟の原告側勝訴が確定したニュース（2019年）は記憶に新しいが，瀬戸内海にある３つのハンセン病療養所が世界遺産登録を目指していることもあり，岡山県に暮らしていれば往々にして見聞きする言葉でもあるようだ。そしてまた，感染症であるという意味で，コロナ禍の今（2020年９月），ハンセン病の歴史にはまた新たな光が当たっているように思われる。

しかしながら，私自身は昨年（2019年）春に岡山にご縁をいただくまで，長島愛生園が瀬戸内市に位置することすらぼんやりと認識していたに過ぎなかった。この機に，自分なりにハンセン病に関する知識を深めたいと思うに至ったが，一言でハンセン病と言ってもその歴史や考察の視点は多岐にわたる。そこで今回は，かねてより愛読書の一つであるコナン・ドイルのハンセン病を題材とする一編に触れながら，主に日本におけるハンセン病の「差別」と「隔離」について再考する。本稿は，知識として凡庸なものの域を出るものではないかもしれないが，こうした機会を特に若い世代と共有できれば幸いと考える。

「白面」が意味したこと

「や，ゴドフリ！やっと会えたぜ！」

すると相手はそれを払いのけるようにして，

「触っちゃいけないよ，ジミ。離れててくれ！よく見ろ！…」

彼の様子は確かに普通ではなかった。かつてはアフリカの日に焦げた顔のくっきりとした美青年だったことが容易にうなずけるが，それが今は黒い顔のあちこちに妙に白っぽい斑点が現れているのである。（『白面の兵士』70ページ）

コナン・ドイル（Sir Arthur Conan Doyle，1859－1930）のシャーロック・ホームズシリーズは，1887年から1927年にかけて，イギリスの『ストランド・マガジン（The Strand Magazine）』に掲載された人気探偵シリーズである。変わり者の天才的な探偵ホームズと退役軍人で良心的な医師ワトソン，この名コンビによる鮮やかな事件解決のストーリーは，推理小説の金字塔を打ち立てた。60編あるそのシリーズの中に，『白面の兵士（The Blanched Soldier.1929）』[註2)]という一編がある。あらすじは――

物語は1903年１月のこと，ホームズの部屋へ，ボーア戦争から帰国したとある軍人が助言が欲しいとの依頼でやってくることから始まる。依頼人によると，帰国後，南アフリカでの戦友ゴドフリと連絡が取れないため，ゴドフリの実家を訪ねた。すると，ゴドフリの父親に“ゴドフリは世界一周の旅に出ている”と突っぱねられ，どうも様子がおかしい。そのまま屋敷に泊めてもらって夜を迎えると，突然窓の外に当のゴドフリが現れたのだが，その顔は「まるで死灰のようにまっ白」，しかも目が合うと，一目散に闇の中へ逃げ出してしまった。どうやら，ゴドフリは何らかの理由で屋敷の離れに幽閉されているらしい――どうしたものか。この依頼話を聞いたホームズは，家人や見張り人の様子などから，ゴドフリが身を隠している理由にあたりをつけ，実際に家に乗り込むと，追い返そうと語気を強める父親をたった一枚の紙でなだめることに成功する。その紙には，一言“Leprosy”と書かれていた。

ハンセン病は現在考えられているよりずっと深刻な病だった。冒頭引用した箇所は，物語の終盤で，依頼人が戦友に会えた場面なのだが，そこで残酷な現実を目の当たりにするのである。「妙に白っぽい斑点」の現れている顔――「白面」が意味したのは，ただただ恐怖と絶望だったのだろう。それは無慈悲な外見上の症状に加えて，その病に罹患していることが，すなわち社会からの過酷な差別的言動を受けることを意味するからである。本稿では古来よりのハンセン病の歴史をまとめるのではなく，なぜハンセン病がそれほどまで疎外されたのか，その背景に何があったのか，近代日本におけるハンセン病に対する疎外の記憶を振り返りたい。

その際，上記の『白面の兵士』を引用する箇所もある。近代日本の考察において，イギリス小説を引き合いに出すことの妥当性に懸念があるかもしれないが，あくまで一つのきっかけとして，またハンセン病をめぐる悲哀にある程度の世界的な共通点があったことを考慮して，そして何より，今なお世界中の人々に親しまれているシャーロック・ホームズを介することで，この問題を単なる「歴史」としてではなく，よりいっそう身近に捉える契機となることを期待してのことである。

疎外の記憶

『ねえレーフさん*，たった一つでいいから答えてもらいたいことがある。・・・ゴドフリは死んだのかね？』（＊ゴドフリの家の使用人の名前）

老人は私の眼を見かえすこともできず，まるで催眠術にでもかかったように，のろのろと答えました。実に意外な，恐るべき答えです。

『それでしたら，ほんとうによろしいのですけれど！』（『白面の兵士』58ページ）

日本では“業病（ごうびょう）”と呼ばれて恐れられたハンセン病では，その患者や家族にまで，過酷な差別的言動が周囲の人から向けられたのは周知のことだろう。そうした行為は，1930年代ごろから始まった「無癩（らい）県運動」において，国が率先して患者の強制隔離政策を行ったことで，国家による正当化が行われ，推進されていたようなものであった。その背景としては，当時，第２次世界大戦前の帝国主義政策を推し進めるにあたり，日本は欧米列強と肩を並べることに躍起になっており，ハンセン病患者の存在を国家的に秘する必要があったことが大きい。

ところが，そうした政策は地域によって違いはあるものの，全体としては，敗戦後も変わることがなかったのみならず，かえって加速した地域もあり，無癩県運動も60年代半ばまで続いた。またその後も，積極的で強制的な連行こそなくなったかもしれないが，世間的には患者たちは常に日陰の存在として療養所での人生を歩むしか許されていなかった。

一方で，その間，ハンセン病に関する世界的な研究は大きな進歩を遂げていた。1943年，画期的な治療薬であるプロミンがアメリカで開発されたのである。ハンセン病は基本的には命を奪うものではなかったが，しかし，プロミンの使用によって，確実に治癒可能な病となったのである。日本でも戦後，輸入され使用が開始された。とはいえ，世間でのハンセン病に対する恐怖心や差別意識は深く根差したままで，国はこうした事態を改善しようとしなかったばかりか，むしろ積極的に放置したようにも見える。

日下先生の自叙伝『玉葱』によれば，そうした差別的意識に小さい時から影響を受けた世代だった先生ご自身も，国立ハンセン病研究所に勤務され始めた頃，「時々この病気に感染した夢に悩まされた」と打ち明けられている[1)]。日下先生が研究所に勤務されたのは1955年のことなので，すでにプロミンも開発されていた，また研究者として，医師としての見識をお持ちだったにもかかわらず，である。「夢」ならば，目覚めると感染していない自分を確認できるが，他方，実際の患者たちの恐怖や絶望はいかほどだったことだろう。感染する夢にうなされたという赤裸々な告白は，ことの深刻さを表している一例かもしれない。

最終的に「らい予防法」が撤廃されるのは1996年を待たねばならなかった。この国家的な怠慢に対して，関係者たちから抗議が起こり，2001年の「らい予防法違憲国家賠償」につながる。その後，2019年には患者の家族に対する国家賠償も成立したが，これはことの本質的な解決とは程遠い。

ところで，一言で差別と言っても，それは患者自身が直接的に言動で被害を受けることだけではない。患者は，差別され疎まれるのではないかとの恐怖心から，症状を時には家族にすら打ち明けられず悩み，家族や親類に対する自責の念や劣等感にさいなまれ，また療養所に入ることになった際には，前途が絶たれたという途方もない絶望感を味わう。

自ら「死」を意識した人も少なくない。先の『白面の兵士』引用箇所は，依頼人が戦友ゴドフリの家の使用人に彼の安否を尋ねる箇所だが，ハンセン病への罹患が死と同等なほどの酷な事

態であったことが明示されている。しかも，患者だけでなく，患者家族も同様に，世間からの差別的言動で多大な実害を受け，時には家族や親類に患者がいることを疎ましく感じ，そうした感情に対して起こる良心の呵責ややり場のない憤りを禁じえなかった。ハンセン病を取り巻く不幸は，幾重にも重なっているのである。

呼称の変遷

ハンセン病に対する偏見や差別を減じようとした社会的な試みがなかったわけではない。その一つは，名称の変更である。「癩」から「らい」へ，そして「ハンゼン氏病」から「ハンセン病」へと，その名称は変遷をたどった。現在使われている「ハンセン病」という名称は，1874年にらい菌を発見したノルウェーのアルマウェル・ハンセン（Armauer Hansen，1841－1912）に由来するのは周知のことだが，OEDによれば，レプラ（らい）の代わりに“Hansen”が使われた初出は*Journal Path. & Bacteriol*. Ⅷ において，1903年のことである。それにしても，「らい菌」という言葉の使用は差し支えないのに対して，「癩（らい）病」という名称はなぜ差別的なのか，この点について実感として湧いてこない人も少なくないだろう。

そもそも「癩」という漢字は，「厲（らい/れい）」ないし「癘（れい/らい）」から派生したもので，『字源』[2]によると，それらは中国前漢時代に司馬遷（紀元前87年頃没）により編纂された『史記』にまでさかのぼって確認できるという。『史記』の79巻には范雎（はんしょ）伝として，「漆身為厲」との記載があり，これは時の政権の反感を買った范雎（中国戦国時代の秦の昭襄王に仕えた政治家，紀元前255年頃没）が漆を肌に塗って爛れさせ，ハンセン病患者を装いながら逃亡したことを表している。頼尚和によれば，こうした「護身術」としての「漆身為厲」が，紀元前453年頃に主君の仇討ちを試みた豫讓（よじょう）（中国戦国時代の人物）により用いられたと『戦国策（前漢の劉向（紀元前77年－紀元前６年）の編纂）』に記載されている[3]。また，「癘」も『史記』に出典があるが，意味としては「悪しき痕を生ずる病」のことを表している。

さて，その「癩」を日本ではかつては「かったい（乞食の意）」と呼んでもいたが，それは患者たちの長く続いた実際の悲運を反映してのことである。ハンセン病を患った者たちは行き場を失って流れてゆくことも多かった。したがって，「癩（らい）」という言葉を患者に対して使う時には，そうした者たちを侮蔑的に呼んでいた歴史的な差別意識が拭い去れないのである。1996年の「らい予防法廃止」とともに，日本での正式名称も，「らい病」から「ハンセン病」へと変更された。逆説的なことだが，名称を変更しなければならないほど，「癩（らい）」との言葉に必然的に負のイメージが付きまとっていたことを意味している。

“Leprosy”の翻訳

現在では，「癩（らい）病」という呼称の通常の使用は厳に忌避されているが，1927年出版の『白面の兵士』の原著には“Leprosy”が使われているだけでなく，ハンセン病患者に対する差別的な表現が散見される。これを翻訳する場合，その年代によって対処が変わるのだろうか，また変わるのならばどのような配慮がされ，それは何を意味するのだろうか。このような疑問を探るため，『白面の兵士』の現在一般的に入手可能な５つの文庫に当たって，具体的には，①実際に“Leprosy”を何と訳しているか，②差別的な患者への描写をいかに翻訳しているか[註3]，③但し書きのような箇所はあるのかの３点を確認した。

まずは新潮文庫の延原謙訳で，初版は1953年[註4]。延原謙氏は日本でのシャーロック・ホームズの翻訳にかけては第一人者で，早くも戦前

から手掛けていた。こうして長年愛されているのは，ドイル独特のユーモラスで軽妙な語り口を翻訳でも表現しているだけでなく，そこはかとなく漂う古き英国の薫りを自然と味合わせてくれるからだろう。さて，この延原訳では，①は「ライ病」，②は原文に忠実で残酷ともとれる差別的表現を使っている[註5)]，③は見当たらない。延原謙氏は1977年に没しているが，その後新潮文庫は，1991年に改版を出した。改版を担当したのは延原謙氏の嗣子である延原展氏だが，その際も①，②，③ともに変化はない[註6)]。したがって，現在書店などで手に入る新潮文庫は，この「ライ病」を用いたものである。

一方，延原訳改版と同じ1991年に初版された創元推理文庫の深町眞理子訳[註7)]は，①は「ハンセン病」，②は原文を損ねない程度に，しかし延原訳よりは単語の選び方に配慮がみられる[註8)]，③は「訳者あとがき」において，翻訳に際して「原文について少々気になった点」のひとつに，この『白面の兵士』での病者の表現にある「差別感」を挙げている。曰く，「これは，当時のイギリス人としてはやむを得ないものであり，そういうものだったのだと割り切って受け止めるしかないでしょう。ただ，作者の根本的姿勢は変えるべくもないとして，言葉の表現のうえでは，なるべくそれをあらわにしないように努めたつもりです」[註9)]。

この創元推理文庫は2017年に改版したものを新版として出しているが[註10)]，その際も①は「ハンセン病」，②は改版前のものより，わずかながらもより柔らかくなった印象があり[註11)]，③は先に挙げた「訳者あとがき」に加えて，「解題」で戸川安宣氏がハンセン病者に対する誤った認識や差別意識を指摘しつつ，ドイルの生きた時代や社会情勢に鑑みて，そのままにしていることを読者にことわっている。

最後に，新訳シャーロック・ホームズ全集の一部として光文社文庫から2007年に出版された日暮雅通訳は[註12)]，①は「レプラ（いまでいうハンセン病）」と表記し，②は今まで挙げたものの中で最も控えめな表現にしているだけでなく，一部不必要と思われる個所を省略さえしている[註13)]，③は巻末の「解説」において，ホームズの時代の大英帝国が世界中に植民地を持っていた「人種偏見があたりまえの時代」だったとして，より普遍的な観点を踏まえて「理解」を求めている。

「文学」と「差別的表現」

こうして５冊の文庫を読み比べてみると，当然のことながら，年代を経るにつれて，差別的な表現に対する意識の高まりや配慮が見受けられる。その一方で，単に年代だけで明確な区別があるわけではなく，あくまでも，出版社や翻訳者として出版の意図や意義をいかに考えるか，ということが反映されていることもわかる。例えば，新潮文庫の延原訳は，1991年の改版時にも差別的表現を弱めていないが，これは初版の延原訳を尊重することを優先しているからだろう。初版の延原訳に関しては，時代的なものだろう，差別的な表現の使用に躊躇らしいものは感じられず，よりドイルの時代の感覚を鋭敏に反映しており，ゆえに，結果として時代を映す鏡としての文学の役割を担っている。

一方，深町訳は1991年の初版でも配慮を示していたものの，2017年の新版ではさらに婉曲な表現へ変更されたが，そこには原文に忠実であろうとする姿勢と，現代の倫理観との間で苦慮した様子がうかがえる。というのも，『白面の兵士』の差別的表現は単に倫理的問題のみならず，物語性と深く関連する。物語の謎やそれに伴う緊迫感は，この病への強い恐怖心や抵抗感ゆえに成立するが，それを抑制的にすれば，自ずと緩急が失われ物語性を損ねかねない。深町訳で施されたきめ細かな配慮は，文学作品における時代的背景やその世界観と，現実の倫理観

との間の葛藤を映し出しているようである。

2007年の光文社文庫で興味深いのはまず,「レプラ」とカタカナの表現にしたうえで，カッコ書きで小さく「いまでいうハンセン病」と表記している。「らい」という言葉はもちろんだが,「ハンセン病」という言葉からもできれば距離を取りたいという慎重な姿勢が表れているだろう。さらに，この日暮訳は患者表現では割愛している箇所もあり，最も控えめで角のない表現でまとめているが，にもかかわらず，但し書きでは差別的表現への歴史的な理解を最も強く求めている。こうしたことから，この日暮訳は強いて言えば，原文に忠実であるよりも，物語性が許すできる限りにおいて，現代の社会通念や倫理観をより反映させている。

いずれとも優劣があるわけでは決してない。書籍での差別的表現に接して，誤った認識を持つことや差別や中傷が許されないのは言うまでもない。だが反面，歴史的検証や学びの場を失うことも有益ではないだろう。

隔離政策

> 「一種の疑似ライで，鱗癬症の明白な一例です。・・・感染の危険に身をさらしてからの，この青年の恐怖と不安はむろん恐るべきものがあったでしょう。そのことが肉体的に作用して，疑似症状を呈するということは，考えられることじゃないでしょうか？いずれにしても私は医師としての名誉にかけて・・・・・・おや，夫人は気絶されましたな。歓喜のあまりショックを受けたのでしょうから，この手当はケントさんにお委せしましょう。」（『白面の兵士』78ページ）

ハンセン病の症状と似通った（とドイルは考えた）病名を挙げるとは，ここはドイルの医師としての知識が生かされている，と同時に，実際にそうした誤診の事例もあったのではないかと想像される。『白面の兵士』には，*The Lancet*や*The British Medical Journal*という今現在もイギリスの２大一般医学雑誌と目されるものが登場するが，ドイルにとっては実際にどちらの雑誌も身近なものだった。中でも1823年創刊の*The Lancet*には，ドイルは医学生のころから目を通していたのみならず，何度も論文を投稿して掲載もされている[註14)]。

さて，物語ではドイルは依頼者に好ましい終局を用意している。実はゴドフリの患っていたのは，ハンセン病ではないことが判明するからだ。親しい友人を欺いてまでゴドフリの存在をひた隠しにしていたのは，当時イギリスでもハンセン病患者に対して強制的な隔離政策が取られていたからなのである。世間に知られてしまうと,「他人の中に隔離されて，生がい出してもらうあてもなく暮らさなきゃならないとは！」

隔離病院や療養所への強制的な連行に対する恐怖心や絶望感は，おそらく古今東西変わらないのだろう。西洋では中世以降, ハンセン病（とは限らないが）の施療院が開設されていたのとは対照的に，日本で初めてのハンセン病専門病院が開設されたのは1875年。その後，相次いで療養所がつくられたが，このころは，フランス人神父やイギリス人伝道師など，外国のキリスト教関係者が携わっていたことが多かった。先にも触れたが，これは行く当てもない病者たちの不遇を見兼ねてのことだった。例えば，1895年，熊本で「回春病院」を設立したハンナ・リデル（Hannah Riddell，1855－1932）は,「本妙寺参道の咲き誇る桜並木の下にうずくまるハンセン病患者たちの姿」に胸を打たれ，その道に力を注ぐことを決意したという[4)]。

けれども，こうした諸外国の宗教的な思想を背景とした救済措置に対して，当時の日本は自らの矜持が傷つけられたと捉えたのではないか。その後，20世紀初頭にかけて公立の療養所

が設立されるとともに，「癩予防ニ関スル件」を公布するなど，ハンセン病患者を管理しようという国家的な動きが始まる。ついで1930年，初の国立療養所である長島愛生園が開園，つづく31年に「癩予防法」が制定されると，行政のみならず，保健所や警察が主体となった「浄化」の名のもと，すべての患者を強制隔離する動きは加速した。

世界的にはハンセン病に関する研究が進み，「らい菌」は非常に感染力が弱いこと，適切な対処で感染リスクは減ること，感染しても発症はまれで，また発症しても特効薬によって治癒すること，そして通院によって治療可能なことなどが明らかとなり，隔離措置を見直す動きもみられた。しかし対照的に，日本の隔離政策は戦後も続き，1953年の「らい予防法」においても継続された。その理由には様々な要因があげられているが，私には戦後日本の高度経済成長を優先した精神の中に，その一端があるように思える。

疎外の理論

再び『白面の兵士』に戻るが，依頼話を聞いたホームズは，すぐにゴドフリが身を隠している理由を３つ考え付く。１つ目は犯罪にかかわった，２つ目は精神に異常をきたした，そして３つ目が何らかの病気。結果的には３つ目の病気の中でも，ハンセン病ということになるのだが，ここで着目したいのは，ホームズがあげたこれら３つの幽閉の理由が，すべて近代国家における疎外の歴史と符合していることである。フランスの思想家ミシェル・フーコー（Michel Foucault，1926－1984）は『狂気の歴史』でいう，「癩者がさまざまの記録から姿をけし，癩者がいなくなる，ほとんどそうなってしまっても，上記の構造は残るようになる。二，三世紀後にもしばしば同一の場所で，排除の現象は，奇妙にも同じ姿で現れるようになる。貧乏人，放浪者，軽犯罪者，《気がふれたもの》が，癩者に見捨てられた役割を果たす・・・」[5]。

フーコーによれば，排除の現象は，当初ハンセン病患者（疑似症状を持つものも含まれただろう）から始まったかもしれないが，その後たとえ患者がいなくなっても別のものを疎外する。例えば，《気のふれたもの》である。彼らは，かつて一種の神がかった存在として社会で許容されていたが，古典主義時代以降，それは理性の暗転として社会的な疎外の対象となった。今，私たちの観点に，《気のふれたもの》は直接関係するわけではない。けれど，ここでフーコーを引用するのは，彼の指摘がより普遍的なものに及ぶからである。そして，それゆえ，彼の指摘がより重要な意味を持つからだ。要するに，「ある一つの感受性が生まれたのである。ある一線を画し，敷居を高くし，そして，選択し，追放する一つの感受性が」[6]。

したがって，対象は《気のふれたもの》だけではない。貧者，行く当てのないもの，法を犯したもの，働けないもの，病人などの，いわゆる秩序ある機能的で生産的な社会に適応しない者たちをひとくくりにして疎外する，そういうことを正当化する感受性によって，この疎外の構図は強化された。フーコーの指摘は西欧の社会を念頭に置いてのものだが，時代的な齟齬はあるとしても，狭義には決して日本もその指摘を免れるものではないだろう。フーコーの翻訳者としても知られる神谷美恵子氏は，フーコーの指摘を「働けない者は疎外するという「産業社会」の理論に対して彼は繰り返し反発している」と解釈している[7]。

敗戦で日本はゼロ地点に立った。そこから，どうにか国際社会で立場を得ようとした試みは，生産性や合理性などに焦点を当てたものとなった。つまり，戦前は欧米列強に対する矜持から，そして戦後は経済的成長を何よりも優先させたことから，社会的な疎外を許容している

感受性を顧みる暇（いとま）がなかったのではないか。生産性に重きを置いた場合，相対的に「人権」は軽くならざるを得ない。したがって，追い求めた経済成長がバブルという形ではじけた後，90年代半ばになってようやく「らい予防法」廃止の検討委員会が設けられたように私には感じられる。

結語に代えて思うこと

先に言及したフーコーの翻訳者としても知られる神谷美恵子氏は，実は長島愛生園で多くの患者たちを診た精神科の医師でもあり，そして何より“島”を愛した一人の女性でもあった。結語に代えて，彼女の詩を一部抜粋だが紹介したい。「癩者に」という[註15)]。

癩者に
・・・
あなたは黙っている
かすかに微笑（ほほえ）んでさえいる
ああ　しかし　その沈黙は　微笑は
長い闘いの後にかちとられたものだ。
・・・
なぜ私たちでなくてあなたが？
あなたは代わってくださったのだ
・・・
心に叫んで首をたれれば
あなたはただ黙っている
そして痛ましくも歪められた面に
かすかな微笑さえ浮かべている。

私は本稿で，ささやかながらハンセン病の差別や疎外の記憶をたどってきたつもりだが，こうして最後に彼女の詩に出くわすと，そうした行為がどれほどの意味があるのかと，今更ながら疑問もわいてくる。歴史を知っているから差別や中傷が繰り返されないのではない。そこにある痛みや不条理や苦しみに思いを致すからこそ，繰り返さないという意識が生まれるだけなのだろうと思う。もちろん，正しい知識は極めて重要であるし，過去への反省や教訓を得ることも大変な意義がある。また，負のイメージが付きまとうなら払拭するためにその名称を変更することも有効だろうし，裁判で国が正式に謝罪することも必要である。しかし，そうした一連の動きは必要条件でもなければ，十分条件でもない。

差別的意識を持っているか否か，というのは，畢竟，ただただそれぞれの心にゆだねられているのだろうと思う。例えば，神谷氏はその生涯で「癩」あるいは「らい」という言葉をほとんど使い続けたし，ハンセン病患者に出会った当初は正しい知識など普及していなかっただけでなく，医師になろうと決めたとき，尊敬する父親にハンセン病の医師になることだけはどうしても許されなかった。

けれども，彼女が「らいの人」というとき，その言葉には疎外の微塵もあろうはずがなく，その言霊は彼女がかかわるハンセン病の人たちには自然と伝わっていた。彼女が「島」というとき，そこには温かな気持ちが流れている。「どうして私たちでなくてあなたが？」という，神谷氏を象徴するような詩は，実は彼女がまだ東京女子医学専門学校（現・東京女子医科大学）に在学中，卒業前の実習として初めて長島愛生園を訪れ，12日間滞在したときに詠んだものである。だが，その後も生涯を通してこの心根が変わることは一切なかった。こうした姿勢から，私たちは今一度，自分に立ち返って考えることができるような気がする。

おわりに

最後に，このレポートで言及した中でも傑出した３名の方が，偶然にも岡山県に深いゆかりがあることを申し添えておきたい。言わずもがな，お一人目は本学の日下喬史先生（1926－

2020），先生は岡山にお生まれになり，岡山医科大学を卒業された。卒業後は東京やアメリカなどで研究をされたが，強く帰郷を望まれて1972年には本学の教授として赴任された。先生は決して平坦ではないその人生を，深い自省と不屈の精神で歩んでこられたようだ。本学を退官された後も，川崎医療福祉大学で教鞭をおとりになり，その後もカウンセリングを習得されるなど，たゆまぬ努力と真摯なお気持ちで，社会に多大な貢献をされた。この場を借りて哀悼の意を表したい。

お二人目は，ドイル翻訳の草分け的存在で，その魅力を伝えてくれた延原謙氏（1892－1977）である。延原氏は幼いころに父を亡くし母の里である津山に越してきた，ほんの3歳くらいのころである。その後，津山中学へ通うなど，多感な時期を岡山で過ごした。延原氏はその確かな言語センスによって秀逸な翻訳を数多く残され，また，ドイルだけでなくクリスティなど他の洋書もいち早く日本に紹介された。私も，延原氏の作品を通して，はるか遠い世界を身近に感じた一人である。

最後は翻訳家，精神科医，思想家，随筆家など彼女を定義することが不可能なほど知性にあふれた神谷美恵子氏（1914－1979）である。神谷氏は岡山県出身だが，実のところ一家はすぐに東京に移って行かれ，その後はスイスやアメリカなど諸外国で過ごされたこともある。しかし，関西にお住まいだった当時神谷氏が40歳を過ぎた頃，まるで運命のめぐりあわせのように，“島”に研究に来ることになり，その後は精神科医として泊りがけで“島通い”をされた。当初は幼いご子息を関西に残してのことだった。体調を崩してやむを得ずお辞めになった後も，心はずっと“島”とともにあったという。僭越ながら，私も岡山に縁をいただいたものの一人として，素直に誇りに思うのである。

謝　辞

本研究の一部は，公益財団法人ウエスコ学術振興財団によった。ここに感謝の意を表する。資料収集は，公益財団法人両備檉園記念財団の交付助成金によった。ここに感謝の意を表する。また，引用文献資料を提供して頂いた川崎医科大学中央研究センターRIユニットに感謝する。川崎医科大学生化学教室の川井千景氏には，執筆にあたり有益な助言と資料の提供を受けた。ここに深謝の意を表する。最後に，創作の自由を奨励くださる川崎医科大学生化学教室の栗林太教授に深謝する。

本論文に関して，開示すべき利益相反事項はありません。

註

1）本論文は共著で執筆しているが，書き手（話し手）として第一人称単数（私）を用いた。

2）本稿では以下を原著として参照した。
Sir Arthur Conan Doyle: The Case Book of Sherlock Holmes, The Blanched Soldier. New York, Book of the Month Club. 1994
（Copyright 1927 by George H. Doran Co. Copyright renewed 1955 by Adrian M. Conan Doyle and Lena Jean Annette Conan Doyle. This edition was specially created for Book of the Month Club in 1994 by arrangement with The Estate of Arthur Conan Doyle.）
また本稿での翻訳『白面の兵士』の引用は特に言及しない限り一貫して以下に依るものである。（なお混同を防ぐため，以下での言及に際してⒶとする）
Ⓐコナン・ドイル（延原謙訳）：シャーロック・ホームズの事件簿．東京，新潮文庫．1985年59刷（初版1953年）．48-78ページ

3）患者の差別的表現の比較には，原著での以下の箇所を対象とした。

In front of me was standing a small, dwarf-like man with a huge, bulbous head, who was jabbering excitedly in Dutch, waving two horrible hands which looked to me like brown sponges. Behind him stood a group of people who seemed to be intensely amused by the situation, but a chill came over me as I looked at them. Not one of them was normal human being. Every one was twisted or swollen or disfigured in some strange way. The laughter of these strange monstrosities was a dreadful thing to hear. pp. 70-71

4）Ⓐを参照した。

5）具体的には,「茶いろの海綿みたいな気味のわるい両手」,「背筋がぞっとした」,「まともな人間はいない」,「奇妙な不具」などの記載がある。

6）ここで参照したものは，書誌情報としてはⒶと同様だが，改版後の2009年102刷のものである。

7）Ⓑコナン・ドイル（深町眞理子訳）：シャーロック・ホームズの事件簿．東京，東京創元社．1994年（1991年初版）を参照した。（なお混同を防ぐために，以下での言及に際してⒷとする）

8）Ⓐとの比較では，Ⓐ「背筋がぞっとした」をⒷ「冷や水をあびせられた」，Ⓐ「まともな人間はいない」をⒷ「五体満足な人間がいない」，Ⓐ「奇妙な不具」をⒷ「奇形があった」としている。

9）上記Ⓑの485ページ

10）ここで参照したものは，書誌情報としてはⒷと同様だが，改版して2017年「新版」として出されているものである。（なお混同を防ぐために，この新版を以下での言及に際してⒸとする）

11）Ⓑとの比較では，Ⓑ「奇妙にねじれたり」をⒸ「妙な具合にねじれたり」，Ⓑ「奇形があった」をⒸ「欠損があった」など変更を加えている。

12）コナン・ドイル（日暮雅通訳）：新訳シャーロック・ホームズ全集，シャーロック・ホームズの事件簿．東京，光文社．2007年（初版）を参照した。

13）該当箇所を省略せず引用する。「目の前に，頭ばかりがおおきい，やけにちっぽけな男がいて，凄まじい勢いでわけのわからないことをわめきながら，茶色のスポンジみたいに見える両手を振り回していた。その後ろにもひとかたまりの人間がいて，おもしろそうに見守っている。みんな，おかしな具合に身体がねじれたり膨れたりゆがんだりしてる。それに，いっせいに笑っているんだよ。」とのみ記載している。

14）ダニエル・スタシャワー，ジョン・レレンバーグ，チャールズ・フォーリー（日暮雅通訳）：コナン・ドイル書簡集．東京，東洋書林．2012年によれば，母親へ宛てた手紙で何度もランセットが登場している。例えば，1882年バーミンガムからの書簡では,「今週の《ランセット》誌に載った，白血病について書いた僕の論文を見ましたか？」。

15）この詩は，神谷美恵子のいくつかの書籍で確認できるが，ところどころ漢字の表記などにバラツキがみられる。ここでは以下を参照した。神谷美恵子：うつわの歌　新版．東京，みすず書房．2014年．22-24ページ

引用文献

1）日下喬史：玉葱．総社，1999，p73

2）簡野道明：字源．東京，角川書店．1955（初版1923年），p1292

3）賴尙和：文献上より見たる中国癩病史の一端．レプラ，1953，pp186-187

4）諸澄邦彦：ハンセン病患者救済の歴史．Isotope News，693号．2012，p16

5）ミッシェル・フーコー（田村俶訳）：狂気の歴史．東京，新潮社．1975，p24

6）ミッシェル・フーコー（田村俶訳）：狂気の歴史．東京，新潮社．1975，p95

7）神谷美恵子：ケアへのまなざし．東京，みすず書房．2013，p243